

松尾浩一郎著

## 『日本において都市社会学はどう形成されてきたか』

——社会調査史で読み解く学問の誕生』

評者：森久 聡

都市社会学といえ、欧米の都市論を取り入れた理論研究だけではなく、社会学の実証研究の領域として代表的な領域である。いわゆる理論研究では学説史的な検討は不可欠であり、それらの著作を通読することである程度の学説史の展開は知ることができる。しかし、近年では実証研究の領域において学説史的な検討を単著として作品化したものは、ほとんど存在しないのではないかと。本稿で書評する松尾浩一郎氏の著書『日本において都市社会学はどう形成されてきたか』は、そうした数少ない作品の一つと言えるだろう。

大まかに本書の全体構成を示しておく。まず第1章で本書の視点と方法が示され、都市社会学の形成過程を社会調査に焦点をあてて論じることが述べられている。そして第2章では労働問題を中心としてスタートした欧米と日本の都市研究や都市を対象とした社会調査の展開が描かれる。つづく第3章において、このように始まった都市の社会調査が日本の社会学界のなかでどのように位置づけられてきたのかが論じられる。それを踏まえて奥井復太郎と近江哲男の鎌倉調査（第5章）や日本都市学会による都市調査との差異化（第6章）、シカゴ学派都市社会学の受容（第7章）に関する議論を重ねてい

き、第8章でサーベイ調査が都市社会学で一定の地位を占めるまでの展開が述べられている。これらの議論を重ねることで都市社会学の形成過程を描かれているのである。さらに最後に湯崎稔の爆心地復元調査を「あり得たかもしれない都市社会学」として再評価し、本書の総括を行っている。

\*

本書の特徴は、都市社会学の形成期に焦点をあてていることと都市を対象とした社会調査に絞っているということであろう。実証研究の領域においても、先行研究のレビューによって自身の研究の学問的意義と社会的意義が明らかにすることができるため、先行研究のレビューは必須の課題ではある。しかしながら、実際には一連の社会調査の過程で生じる実務処理に追われてしまい、なかなかじっくりと腰を据えて学説史を振り返ることは難しい。そうしたなかで学問分野の形成期に焦点をあてた本書の分厚い記述は、多くのことを学ばせていただいた。また社会調査に絞ったことで、都市社会学の形成期の古典的な著作の背景や問題意識などが明らかになり、これまで代表的な著作を読むだけでは理解できなかった背景の部分を知ることができた。

また本書のように実証研究の分野を学説史的に検討することは、理論研究においても重要な課題であると思われる。社会学理論が現実社会を分析する言葉であるならば、学説史的な検討であっても、その研究がどのような具体的な現実を見ていたのかは踏まえる必要があるからである。都市社会学においては、この理論と実証が交差する地点が社会調査史であった。その意味では、本書は都市社会学のレビューといった狭い世界の意義だけではなく、理論・学説史研究のひとつの型としても注目されなければならない。

さらに本書の学問的な貢献は次の点にもある。このように既存の研究を一連の歴史として位置づけるだけではなく、学説史研究のもう一つの意義は、優れたものでありながら、歴史の中に埋もれている研究の発掘と再評価であろう。それを本書では「あり得たかもしれない都市社会学」として、湯崎稔の爆心地復元調査を取り上げ、都市社会学が制度化されていく過程で傍流として埋もれていった湯崎の社会調査が持っていた可能性を論じている。湯崎稔の爆心地復元調査は一般的には都市社会学とは異なる系譜に位置づけられているが、それを都市社会学にも意味がある研究として掘り起こし再評価することが本書の最も大きな学問的貢献のひとつだと思われる。

ある学問領域において、その分野の研究者が増えていき、一分野として認知されて学会が設立されて、研究の蓄積がすすんでくる（これをさしあたり「制度化」と呼ぼう）と、傍流となって埋もれてしまう研究が生じてしまう。あるいは、一見すると異なる分野であってもその研究内容を上手に読み替えることで、その分野の議論に大きく貢献できる可能性のある研究を見落としてしまう。このような事態に陥らないためにも学説史的な検討は必要なのではないだろうか。

\*

以下に本書を通読して筆者が感じた論点を提示していくが、これらは必ずしも本書の欠点を意味するものではない。むしろ本書が設定している守備範囲を超えた論点がほとんどである。したがって論点の欠落を指摘するというよりも、著者の松尾氏とつかこのような論点で議論して、松尾氏の見解を伺いたいという意図によるものである。

まず「都市社会学」という領域に限定することで議論できなかつた点は何か、である。あら

ためていうまでもなく都市研究は、建築・都市計画の工学分野と政治・経済・社会学、社会思想など多岐にわたって展開されている。それらを横断する、いわゆる「都市論」も存在している。たとえば、ジェーン・ジェイコブスの独自の都市論（たとえば1961年刊行の『アメリカ大都市の死と生』）は、都市研究だけではなく、経済学、社会思想にも多大な影響を与えている。実際に都市社会学に関連する領域で実証研究をしてきた評者もジェイコブスなどの都市論から受けた影響は大きい。この点については本書の中で都市論との関連は扱わないことを明言しているし、それを論じてしまうと単著では収まらないものになってしまうだろうが、主要なものだけでも議論して欲しいと思った。

おそらく都市社会学の形成期には、日本都市学会だけではなく建築・都市計画とのつばぜり合いもあったに違いない。この理工系の分野との接点というのは都市社会学などの実証研究の分野では重要なターニング・ポイントになるような気がする。理工系の学問は文系の学問に比べると政策形成過程に組み入れられやすい。都市社会学が政策形成に貢献するような志向ではなく、アカデミックな議論に志向していったのはこういった背景があるようにも思う。そして同時に、理工系の分野と対等にわたりあうために、より「科学的」な調査分析の手法と研究成果を打ち出そうとして統計的な手法を用いたサーベイ調査に偏っていったのではないかと推測する。このように考えると、日本都市学会だけではなく、都市社会学がいかに他分野の存在や社会的関心のなかで学問分野として形成されていったのかも議論して欲しいと思った。

そして都市社会学の社会調査に研究対象を絞っているが、都市社会学の学問的な動向と実際の都市の変動についてはどのように相互連関しているのか、もう少し明示的に論じて欲しい

と感じた。具体的な現実を相手にするのが社会調査であり、現実のあり方に社会調査の営みが規定されてしまうことは少なくない。いくら理論的な考察を深めても実証することが困難な論点も存在する。その一方で、新しく生まれた具体的な都市の現実を記述し理解する言葉を探して新たな認識枠組みが形成されることも少なくない。その典型的な例が、公害・環境問題を対象とした環境社会学における受苦圏・受益圏や被害構造論であった。とするならば、とくに戦後の大きな社会変化のひとつは「都市化」であり、眼前に広がる都市の現実を前に、都市社会学は社会調査に基づいてどのような言葉を紡ぎ出し、そして都市社会学の理論はどう刷新されていったのか。

そして関連して論じて欲しかったのが、「都市」という現実や「都市」に対する社会的な関心の有り様である。社会調査は具体的な現実を相手にする以上、その社会調査が行われた時代背景を理解することが社会調査を理解する上で重要なポイントになる。評者の不勉強でしかないのだが、たとえば鎌倉調査については、当時の鎌倉がどういった都市であったのか、都市問題に対し人々はどのような問題意識を持っていたのか、こういった背景を事前に予習できた方が、鎌倉調査の内容や目的、調査手法に関する議論を理解できたように思う。というのは、特に戦後の都市社会学は近代社会の発展によって都市化していく地域、いわば「近代都市」を対象としてきたようだが、評者がフィールドワークを続けている広島県福山市の鞆の浦地域のように、近代以前から「都市」であった「伝統都市」ではその都市的現実は特に社会生活の側面では大きく異なっているのではないだろうか。だとすると、都市社会学の創成期の研究者が、具体的にどういった「都市」を念頭において論じていたのか、その時代の「都市」とはどう

いったものであったのか、知りたいと思った。

以上が分厚い大著にもかかわらず評者が「無い物ねだり」をしてしまった内容である。実証系の分野でこのような学説史を通じた作品は少ないため、このような本書が生まれたことは、それだけ都市社会学の層が厚いこと、多様な蓄積を有していることを示している。そして、その分厚い歴史に分け入った本書の意義は変わらないと思う。

\*

評者は院生時代より、環境社会学をメインの研究領域としており、環境社会学の学会の設立の経緯や時代背景などを先輩研究者から教えてもらった。その話を補助線に本書を読み解いたので、環境社会学と都市社会学のそれぞれの創成期の関連を最後に述べてみたい。

環境社会学では公害問題の研究からスタートして、環境問題への社会的な関心が高まる1990年代に環境社会学会は生まれたという。先行する実証研究の系譜として、既に都市社会学がサーベイ調査が中心になって社会学全体で実証研究の分野として都市社会学が確立していたが、後発の環境社会学は定性的データが分析の中心になっている。おそらく、これは公害・環境問題を論じる時に「都市」という変数だけでは議論できないということや都市社会と公害被害という研究対象の違いによるものだけではないのかもしれない。既存の研究との関わりで、同じ実証研究への批判としての意味合いや環境社会学としての独自性を打ち出す必要性から、このような志向が生み出されたものと思われる。また都市社会学の創成期は環境社会学と同じように必ずしもアカデミックな研究を志向していたわけではなく、都市社会学が制度化されているなかでそのような志向を強めていったという。評者のような若手から中堅の世代からすると都市社会学というとアカデミックな実証

研究を志向するイメージを持っていたので、このような記述は今後の環境社会学の行方を想像するのにあたって印象に残った。また「都市化」の進行によって研究対象としての「都市」が学際的になったがゆえに、日本都市学会とは異なり、日本都市社会学会ではアカデミックな志向を強めたとも論じられていた。環境社会学の場合も、学際的であり理工系の環境問題研究とも接点が多いが、むしろそれを維持しつつ、社会学としての独自性を見いだそうとしているところに違いを感じる。さらに話は逸れるが、最近、評者が参加している産炭地研究会では、社会学の枠にとどまってはダメだ、歴史学、経営学、工学も含めた「炭鉱の社会科学」でなければならないというのがマニフェストの一つになっている。環境社会学の志向も産炭地研究会のマニフェストも、都市社会学のアカデミックな志向を踏まえているのかもしれない。

しかしながら、公害被害から環境問題の意識

が定着し、環境社会学が制度化された現在、環境社会学は当初の勢いを失っているように感じられる。この環境社会学会の形成期の盛り上がり都市社会学の形成期の議論は響きあうところがあるが、環境社会学は停滞・閉塞感を感じるのは、環境社会学も都市社会学と同じように、制度化によって「あり得たかもしれない」環境社会学を捨ててきたのかもしれない。学問分野の制度化によって学問志向の多様性が喪失する磁場が存在するとしたら、それに抗うためにも本書のような学説史研究が必要なのであろう。

(松尾浩一郎著『日本において都市社会学はどう形成されてきたか——社会調査史で読み解く学問の誕生』MINERVA 社会学叢書 48, ミネルヴァ書房, 2015年4月, xiii + 396頁, 本体7,000円+税)

(もりひさ・さとし 京都女子大学現代社会学部准教授)

## 大原社会問題研究所叢書

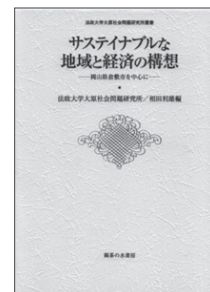
最新刊

### サステイナブルな地域と経済の構想

——岡山県倉敷市を中心に

法政大学大原社会問題研究所・相田利雄編

2016年3月 本体5,800円+税 御茶の水書房



現代社会と子どもの貧困——福祉・労働の視点から

2015年 原伸子・岩田美香・宮島喬編 大月書店

労務管理の生成と終焉

2014年 榎一江・小野塚知二編著 日本経済評論社

成年後見制度の新たなグランド・デザイン

2013年 法政大学大原社会問題研究所・菅富美枝編著 法政大学出版局

福祉国家と家族

2012年 法政大学大原社会問題研究所・原伸子編著 法政大学出版局

農民運動指導者の戦中・戦後——杉山元治郎・平野力三と労農派

2011年 横関至著 御茶の水書房